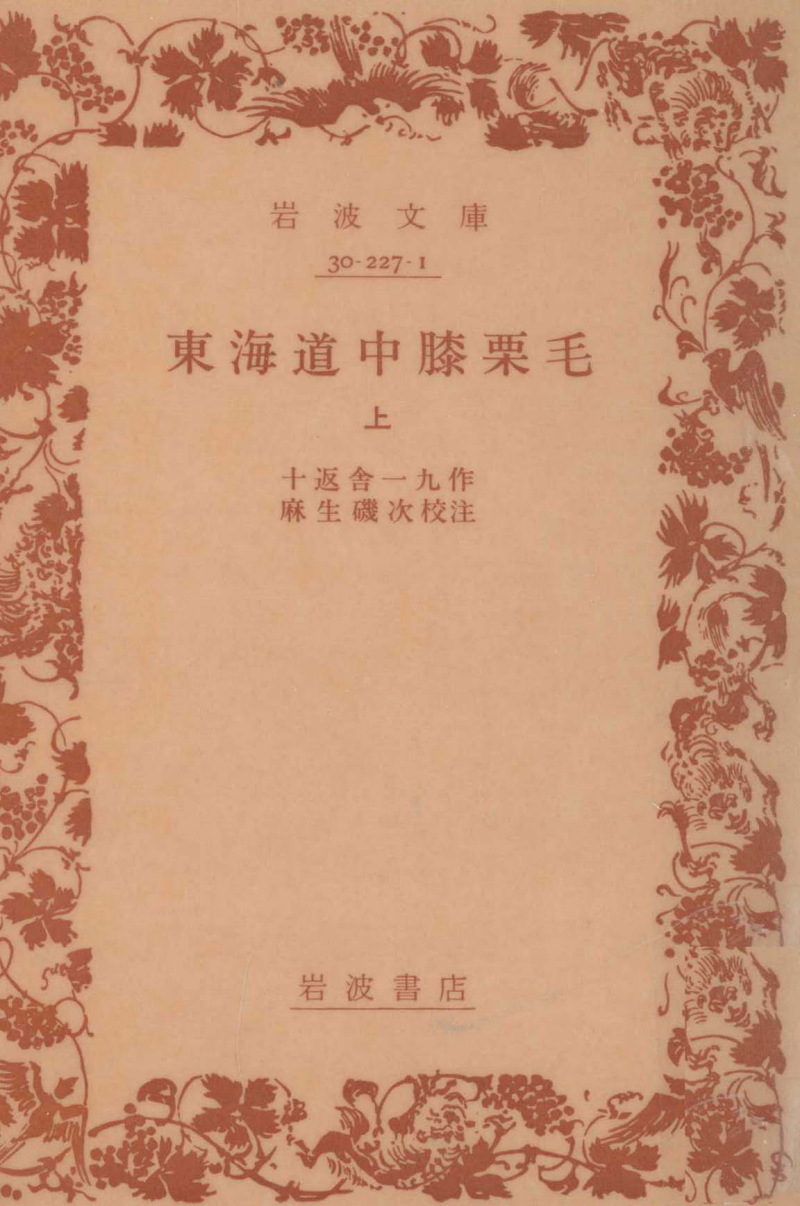




岩波文庫

30-227-1

東海道中膝栗毛

上

十返舎一九作
麻生磯次校注

岩波書店

東海道中膝栗毛(上) 〔全2冊〕

1973年9月17日 第1刷発行 ©

1987年4月20日 第16刷発行

定価 450 円

校注者 あそ 麻 う 生 いそ 磯 じ 次

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・法令印刷 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-302271-8

岩 波 文 庫

30-227-1

東 海 道 中 膝 栗 毛

上

十返舎一九作
麻生磯次校注



岩 波 書 店

解 説

十返舎一九の道中膝栗毛は、享和二年に初編を出してから、文政五年まで二十一年の長年月にわたって出版されたものである。ちょっと見ると如何にも気楽に筆を進めたようであるが、実は相当の苦心が存していた。そこでまずその内容体裁の上から見て、どういう種類の文学の系統をひき、またどういう文学的資料が集められているかについて略述する。

構想上の影響を洒落本にうけている点が少くない。書式は洒落本と同様に、会話を主としてこれを大字に書し、地の文は小書にし、トと受けて二行に割り、人物の行動や服装などを叙述する体裁になっている。洒落本のこの体裁は、芝居の台本などの影響と思われるが、膝栗毛の場合は、直接洒落本の様式を学んだものであろう。筋の形態を見るに、各場面は有機的に統一されていない。読本や合巻のような筋の計画や発展はなく、一貫した叙述の体裁を取っていない。ただ場所の関係とか主要人物の関係で連絡を保っているだけであって、話そのものはばらばらに並べられているに過ぎない。大部分の洒落本も同様な行き方をしている。描写の態度が写実的であるとい

う点にも共通なものが見られる。洒落本は遊里を舞台とする人物の身振・服装・風俗・言語などを如実に描写した点に特色が見出せるのであるが、その点は膝栗毛も同様であって、各地の遊廓や宿屋の特色とか、方言とか、身分に應ずる言葉・身振・態度などを克明に描いている。

内容について見るに、膝栗毛は読本や合巻などと異なり、現実に材料を求めている。ことに遊女・飯盛・贅女などの女性を相手に痴態を演ずることが主な興味になっているが、その点でやはり洒落本と共通なものが見られる。ただ洒落本が主として江戸の遊里を舞台にしているのに対して、膝栗毛は専ら地方の遊女や飯盛を取扱っている。もっとも洒落本の中にも「変通輕井茶話」のような作品があつて、これは信州追分の遊女を描いたものであるが、その趣向の一部はそのまゝ膝栗毛にも踏襲されている。三島の宿、安倍川の遊廓、岡崎の遊廓、古市の遊廓など、膝栗毛には洒落本風な場面が少くない。つまり膝栗毛は洒落本の舞台を地理的に拡大し、地方的な風土物産等をもって、さらに潤色を加えたものといえるのである。

膝栗毛は弥次郎兵衛北八の二人物を中心にしてゐる。作品の中心に二人物を置き、相互の對話及び行動によって事件の推移を図るという作品は先例を求むるに難くない。例えば能狂言のシテ・アドの如きはそれである。膝栗毛の趣向には狂言が多く取込まれており、なお後編の冒頭には狂言詞の利用があり、姉妹編たる「金草鞋」にも冒頭にこれを用い、なお鼻毛延高・筑羅坊の

二人をシテ・アドとして扱っている点などから見ると、作者が狂言の形式内容に相当関心をもっていたことが考えられる。

なおこの場合、適当な粉本として従来考えられているのは「東海道名所記」で、これには染阿弥陀仏と大阪の手代とが中心になっている。また「竹斎」には竹斎と白眼之介、「新竹斎」には筍斎と睡毗介、「紫の一本」には陶々斎と遺佚の二人物が出ている。これらは同類の書であって、同一趣向のもとに二人物を中心に物語がすめられている。弥次北はいわばそれらの人物の末裔に過ぎないのであるが、ただ従来的人物に比べるとその存在が著しく目立っている。竹斎その他の人物は作中においてあまり活躍していないが、弥次北の行動はかなり劇的であって、その地位は重要なものになっている。そしてこの二人はほとんど対等の地位にある。従来的人物は主と従、或いは話し手と聞き手の関係になっているのであって、一方の人物の存在はことに稀薄である。弥次北にもややこの傾向はあるが、道中における二人の行動はほとんど対等に描かれているのである。

膝栗毛は一種の狂歌咄ともいえる。「竹斎」や「東海道名所記」にもこの傾向は見られるが、その他に狂歌咄の類は少くないのであって、膝栗毛はその系統を追うている。説話構成の具合を考えてみても、笑話式であるといえるのである。膝栗毛は笑話の数々を五十三次或いは六十九次

に配列して、弥次北の二人物をもって貫いているのであって、全体的な筋の計画はあまり問題とされていない。落咄はその場限りの写生やうがちを生命とし、「おち」をもっていることを特徴とする。そのおち方は語戯によるか、身振や表現によるか、いろいろであるが、弥次北の演じた失策錯誤もそれぞれ「おち」をもっているものであって、事件の一段落をもって分割すれば、数多くの笑話落咄として独立し得る性質のものである。黄表紙も内容的に見れば、笑話的な性質を有している。「凸凹話」(京伝、寛政一〇)の如き、「東海道五十三駅人間一生五十年」と角書し、東海道の名物に人間の一生の何かとを附会した作もあったくらいで、これなどは恐らく膝栗毛に対して何らかの暗示を与えたものと思われるのである。

膝栗毛には先行作品の影響が少くない。最も関係の深いのは狂言であって、東海道中だけについて見ても、どぶかつちり・狐塚・つんぼ座頭・犬山伏・瓜盗人・腰いのり・鱸庖丁・磁石・武悪などの趣向が反映している。続編及び続々編になると、狂言との関係は一層濃密になっている。概して興味の深い大がかりな趣向は狂言に多く拠っている。ことに続編ではほとんど狂言の点綴に成る編も二三見出せるほどであるから、実質的には影響は極めて大きいのである。

狂言以外の先行作品の影響も少くない。関係の明らかなものについていえば、芝居万人かつら・譚袋・軽井茶話・世間学者気質・御伽名代紙衣・千尋日本織・通者茶話太郎・開巻百笑・鹿

の巻筆・尾上松緑百物語・西鶴名残の友・徒然草・東海道七里糺梁・醒睡笑・川童一代噺・風流田舎草紙・旅眼石などの作があげられるであらう。

さて膝栗毛はかような作品をどういう風に利用したかという点、まずその趣向をいちじるしく卑俗なものにしている。この傾向は正編よりも続編に至って甚だしい。それから滑稽がひどく誇張されている。たとえば狂言の持味は単純素樸な可笑味にあるのだが、膝栗毛はこれに学びながら、その筋を複雑にし、笑を賑やかにしようと苦心しているのである。

狂言「どぶかつちり」と、その翻案、塩井川の川越と掛川の茶店の場(三・下)とを比較すると、その趣向がいちじるしく細かになっているのに気付くのである。原話の登場人物はわずかに三人であるが、膝栗毛では、大市・さる市・弥次・北八・茶屋女・茶店の亭主・子守など、数人になっており、それも複雑な関係で取扱われている。盲人どもの拳のこと、たくらみがばれて北八が川にはめられること、盲人共の蔭口のこと、盲人共が茶店の亭主に掛合うこと、子守が弥次北の奸計を発くこと、茶碗の酒のにおいが証拠になることなど、いずれも原話には見られない趣向である。またそれぞれの人物をある程度まで活躍させ、茶屋女の呼び声や長持人足の唄までも挿入して、情景を活かしている。単純で大まかな室町時代の滑稽話が、趣向を細かにして近世風なものに書き換えられているのである。話の前後の続き具合も自然であって、無理がなく、木に竹を

ついだのような感じを与えない。古い趣向を新しく書き換えることは黄表紙などの常套手段であったが、膝栗毛にも同様な苦心が見られるのであって、ことにその正編ではその苦心はかなり報いられている。狐と誤認して人を縛る話(四・上)、虎字を描いて犬を避ける話(五・下)、女郎屋で禪を棄てる話(五・追)など、いずれも原話に比べて趣向が繊細になっている。

膝栗毛が作者の気紛れな筆に成るものではなく、用意と苦心の結果できたものであることは、材料の蒐集が多方面にわたっていることからもうなずけることである。しかも蒐集の材料は、生のままで、ただ羅列されたのではなく、膝栗毛という全体の気分調子の中に統一され摂取されている。古い話を近世の習俗に合わせるように、過去の材料を巧みに換骨奪胎しているのである。

膝栗毛の初編は、京伝が草稿を一九に与えたものであるという説が、「西沢文庫伝奇作書」にある。また俳歌堂正業(酒井仲)が書いたものを、望まれるままに一九に与えたという説も「上毛偉人伝」に見えている。これらの説は、そのまま鵜呑にするわけにはいかない。ただ京伝は、飛雄亭の「善惡道中独案内」や無々道人の「迷所邪正案内」などの後をうけて、「貧福両道中之記」(寛政五年)のような道中物を書いているのであって、それらの作が膝栗毛の製作に何らかの暗示を与えたことは事実であらう。

一九は膝栗毛の初編を書いて、長い間恩顧をうけていた葛屋重三郎に示した。ところが葛屋は

これまで一九の作では当たったことがなかったので、黄表紙ならば兎も角、中本の作を出すことを躊躇した。その事を村田屋治郎兵衛が聞き、一九が板下も挿絵も一人で済ますというので、あやぶみながらも板元となって享和二年に初編を出版することになった。それが意外にも好評だったので、享和三年には後編二冊、文化元年には三編二冊、同二年には四編二冊、同三年には五編二冊、同追加、同四年には六編二冊、同五年には七編二冊、同六年には八編三冊が出版され、ここに東海道中膝栗毛は完成した。書肆も四編までは「通油町 村田屋治郎兵衛」となっているが、五編からは「大坂書林 心斎橋唐物町 河内屋太助、東都同 本石町二丁目 西村源六、通油町 鶴屋喜右衛門、同所 村田屋治郎兵衛」と列挙されている。

第八編の奥附には「道中膝栗毛初編 来午 再版」という予告があつて、「原板ことの外摺つぶし候故、再板仕候ニ付、作者又々相考、発端一冊あらたに書加へ、全二冊となしさし出シ申候、不相替御求御高寛可被下候」とある。實際膝栗毛は非常に歓迎され、何度か摺り直されたのである。発端一冊は江戸出発以前に遡って、弥次北の素姓をのべたものであるが、これは初編から遙かに遅れて、文化十一年に出版された。

文久二年には改板本が出た。これはいろいろの点で初板本と異なっている。初板本は八編十七冊と発端一冊とであるが、改板本は十編二十四冊で、発端は初編の上冊となっている。そして外

嶋参詣、同九年には三編上下木曾街道が出た。

木曾街道は同十年四編上下、同十一年五編上下、

同十二年六編上下、同十三年七編上下と続き、

同じく十三年には八編上下従木曾路善光寺道、

文政二年九編上下善光寺道中、同三年十編上下

上州草津温泉道中、同四年十一編上下中山道中、

同五年十二編上中下同じく中山道中が出た。十

二編下冊巻尾に「此膝栗毛則十二編にて全く満

尾す。抑初編売出してより当年廿一年ぶりにて

目出度成就す。短才愚盲の鄙筆事たらぬがちに

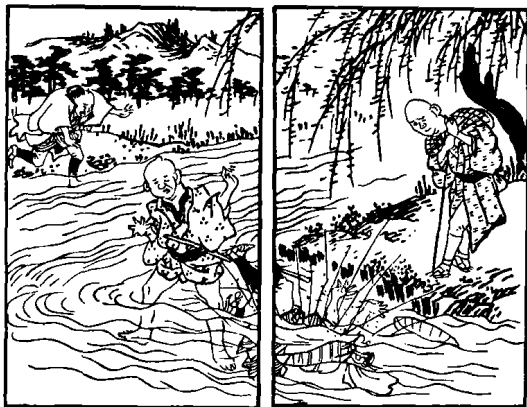
て趣向も既に尽たれば、いらざる長物の譏そしりをお

それて此編に筆をさしおきぬ」とあるように、

享和二年初編を出してから二十一年かかって、

ようやく弥次郎兵衛と北八は江戸に帰ることになったのである。思えば長い道中であつた。十二

編の序でも「むかしより戯作の書のかばかり編数をかさね出せるは例なく、予が生前の悦び、偶



(改板本。本文222頁の挿絵参照)

中の祥さいはろなれば、めでたく筆を採おさめぬ」といっているが、蔦重に断わられ、村田屋に頼んでようやく出してもらった膝栗毛が、かほどまで長続きするとは、作者も全く思いもうけぬことであつた。

一九の伝記については、「続膝栗毛」五編の末に、板元西村永寿堂の名で次のように記載されている。

一九子性は重田、字は貞あざな一、駿陽すんようの産なり。幼名を市九いちくと云。故に市を一作り雅名とす若冠の頃より或侯館に仕へて東都にあり。其後摂州大阪に移住して志野流の香道かどうに称なあり。十返舎之号黄熟香の北に今子細あつてみづから其道を禁ず。寛政六卯年ふたう復またび東都に來りてはじめて稗史さいし兩三部を著あたらす。耕菴堂版

一九は丸の中に貞の字を入れた熊手型の判を用いたが、「続膝栗毛」五編の巻末にその由来を説明して「一九生酉ノ年也、故ニ酉ノ町ノ唐ノ芋熊手ノ形ヲ用ユ」といっている。彼は明和二年酉年駿河の府中に生れた。浅草東陽院の過去帳に「駿河国府中生、元千人同心の子重田市次郎、初代十返舎一九事」とあるという。「名人忌辰録」には「名貞一、通称重田与七、幼名幾五郎」とある。そこで三田村鳶魚氏は「滑稽本名作集」の解題で、幾五郎の「幾」から「一九」という号にしたという方が聞えがよいといっている。「続膝栗毛」五編末に「若冠の頃より或侯館に仕

へて東都にあり」とあるのは、「江戸作者部類」や「戯作六家撰」によれば、それは小田切土佐守であつて、その邸で注簿の役をしていたということである。小田切土佐守直年は、天明元年に駿府町奉行になっていた。

天明三年小田切氏が大坂町奉行になつたので、一九も同地におもむいたが、間もなく致仕し、義太夫語りの家に寄食したり、材木商の家に入婿して離縁になつたりした。その間に志野流の香道を学び、また寛政元年には、若竹笛躬・並木千柳とともに、近松余七の名で「木下蔭狭間合戦」という浄瑠璃を合作した。「忠臣蔵岡目評判」(一九、三)の近松東南の序に「なには江のあしの仮寐に、七とせあまり漂泊して、予が近松の流に遊びし一風士有、今や東のみやこに居を安ふし、その生業となすものは、年毎にものゝ戯れたる限を、草さうしてふものに編出して、其称をおちこちに唱高うなしたる十返舎のうし」とあるのは、その間の消息を伝えたものである。

寛政六年の秋、ふたたび江戸に出て、通油町の地本問屋蔦屋重三郎の食客となつた。そして錦絵に用いる奉書紙に明礬水を引く仕事をしていたが、蔦屋にすすめられて「心学時計草」という黄表紙を綴り、挿絵も一九がかいて寛政七年に出版した。これは吉原の遊女と客のやりとりを、当時流行の心学にあてはめた作であるが、六樹園飯盛の趣向によつたものだといふ。この作を手はじめにして次々に新作を発表し、その名もようやく世間に知られて来た。「江戸作者部類」は

その間の事情を詳しく述べ、さらに「かくて寛政の季に至りて、長谷川町なる町人某乙が家に入夫となり数年ありしに、又其所を離縁して更に妻を娶り、通油町鶴屋の裏なる地本問屋の会所を預りて、其所に住居ぬ。後の妻に女兒出生したるのみ」といっている。

この記事を信用すれば、膝栗毛初編を出した享和二年の頃は、長谷川町に入婿になっていたことになるであろう。だがそこも数年にして離縁になり、さらに妻を娶って、通油町に住むことになった。この妻については「増補青本年表」に一書を引いて「一九の妻女は名をお民といふ、作者の画中にまま見えたり、画面には随分婀娜者なり、一笑」とある。文化二年春の「滑稽じょうけんしつこなし」には「女ぼうおたみ」という言葉が見えるので、少くとも文化元年にはお民という妻があったものと思われる。その頃一九は日の出の勢で、満都の人氣を一身に集めていた。膝栗毛は逐年に出版されて洛陽の紙価を高め、作家としての地位はますます強固になって行った。材料を蒐集するために旅行をして見聞をひろめ、狂歌師としても自信をもち、書法にもくわしく、画もよくした。馬琴は鈴木牧之に与えた手紙の中で「画は少々は出来候」と一九のことをいっているが、素人としてはかなりすぐれた方で、膝栗毛の挿絵なども大方は自作であった。多能多才な作家で、黄表紙の作などもおびただしい数にのぼっている。

一九の家は二度ほど類焼したようである。「膝栗毛」七編（文化五）述意の中で、京坂の材料を集め

るために上京しようとしたが、類焼にあつて思ひを果すことができなかったといっている。その後通油町から深川佐賀町に転宅した。そのことは「続膝栗毛」十編卷末に、板元英盛堂の言葉として、「十返舎一九翁是まで年来通油町に住居いたされ候処、此度勝手ニ付深川佐賀町に転宅いたされ候、知己之御方御用御座候はゞ佐賀丁板元方ニ而御尋可被下候」とある。一九の家はその後もう一度類焼した。「江戸作者部類」に「文政己丑の春三月の大火に会所も類焼したれば、長谷川町辺なる新路の裏屋に借宅す」とある。文政己丑は文政十二年に当る。「会所」というのが通油町の会所だとすれば、深川佐賀町から帰つて来ていたことになる。

「作者部類」は罹災のことに関連して、「この頃より手足偏枯の症にて遂に起す、天保二年辛卯の秋七月二十九日歿す、享年六十七歳」と述べている。七月二十九日とあるのは誤で、浅草の東陽院（現在中央区月島通に移転）の墓碑には「心月院一九日光居士 天保二辛卯八月上ノ七日」と刻まれていた。

此世をばどりやおいとまにせん香とともにつひには灰左様なら
という狂歌はその辞世であるという。翌天保三年には、遺族門弟の手によって、向島長命寺境内に記念碑が建てられた。それにはこういう文字が刻まれた。

なべて人のいかに異なりとおもふことも常となりてはめづらしからねど、いつとてもあかぬ